

P一般-014

後期高齢者の咀嚼能力低下と体格指標（体格指数：BMI・下腿周囲長：CC）・血中脂質との関連について

○ 齋藤寿章、富永一道、西 一也、清水 潤、井上幸夫

島根県歯科医師会地域福祉部委員会

【目的】

後期高齢者の咀嚼能力低下と体格指標・血中脂質との関連について、咀嚼の複合指標（客観的・主観的咀嚼能力の複合指標：客観噛めない&主観噛めない；1群、客観噛めない&主観噛める；2群、客観噛める&主観噛めない；3群、客観噛める&主観噛める；4群、富永らの分類を参考）を用いて検討することを目的とした。

【方法】

平成 28 年度島根県後期高齢者歯科口腔健診と後期高齢者健診の突合データ 2,831 名（男性 1,141 名、女性 1,690 名）を対象とした。客観的評価はグミゼリーを 15 秒間努力咀嚼した後の分割数をグミ 15 秒値とし、男女それぞれ 50 パーセントイルまでを客観噛めない、50 パーセントイル超を客観噛めるとした。主観的評価は何でも噛める/噛めない物があるをそれぞれ主観噛める/主観噛めないとした。咀嚼の複合指標と性、年齢、BMI（痩せ、正常、肥満）、CC（30cm 未満/以上）のクロス集計を行なった。さらに BMI18.5 未満、BMI25 以上、CC30cm 未満、TG150mg/dl 以上、HDL-C40mg/dl 未満、TG/HDL-C3.03 以上それぞれの該当/非該当を目的変数としたロジスティック回帰分析を行なった。ロジスティック回帰分析では性・年齢を共変数とした（CC の分析のみ BMI を追加）。有意水準は 5% とした。TG150mg/dl 以上又は HDL-C40mg 未満を血中脂質異常、TG/HDL-C を冠動脈硬化指標とした。

【結果と考察】

クロス集計では BMI18.5 未満の者は 1 群が有意に多く、BMI25 以上の者は 2 群が有意に多かった。CC30cm 未満の者は 1・2 群で多かった。痩せ該当/非該当、肥満該当/非該当、CC30cm 未満該当/非該当を目的変数としたロジスティック回帰分析で 4 群に比べて有意な関連が観察された群は、それぞれ、1 群、2 群、1・2 群であった。オッズ比はそれぞれ、1.43、1.28、1.64・1.82 であった。血中脂質を目的変数としたロジスティック回帰分析では咀嚼能力低下との関連は示されたが説明力は弱かった。以上から、客観的に噛めないことは痩せと肥満双方に関連し、加えて主観的に噛めないことはサルコペニアのリスク因子である可能性が示唆された。なお、血中脂質の分析については医療的介入が考慮できておらず限定的である。

（COI：開示なし、一般社団法人島根県歯科医師会倫理委員会 承認番号 8）